

日頃より患者サポートセンターの運営にご理解・ご協力をいただきありがとうございます。

患者サポートセンターの活動を3つご報告させていただきます。

★活動報告★

1. リフレクソロジー

令和6年2月20日（火）に英国ベイリースクール
リフレクソロジー認定講師の牧野和子先生をお招きして
実施しました。当院のセミナー室でリフレクソロジーの
説明とハンドリフレクソロジーの体験を行いました。

（参加者：3名）

今回のセミナーの満足度は、
3名とも100点満点中
100点でした。

家族にもやって
あげたいです。

参加者の方のご意見紹介

皆様丁寧に教えて下さい
とてもわかりやすかったです。

リフレの
足の方も
やりたいです。

2. つなぐ～病院から在宅へ

県内緩和ケアの質の維持・向上のために、日ごろ連携させていただいている地域の
医療機関、訪問看護ステーション、ケアマネジャーの方々との症例検討会を行いました。

令和6年2月16日（金）オンラインで「障害を乗り越える～嚙唾のがん終末期患者の在宅看取りを通して
学んだこと～」というテーマで、病院から在宅への支援を院内外関係スタッフで振り返りました。

（感想）

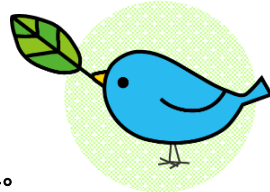
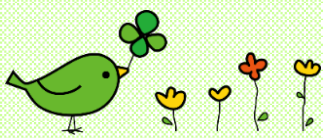
・手話通訳者派遣事業の制度を初めて知りました。関わったすべての方の連携体制が確立してきたことに感銘を受けました。訪問看護ステーションの発表では具体的な関わり方を知ることができ、大変参考になりました。

・「伝える情報をセーブしない」「聴覚障害だからと必要以上に心配しすぎているか」等の考え方が素晴らしいと思いました。「障害があるから難しいだろう」と医療者側に心のバリアが生じる事が、実は一番の問題点なのではないかと考えさせられました。

・障害があるが家にいたい、家族のそばにいたいという願いは障害のあるなしに関係なく、関係しているすべてのスタッフが同じ方向を向いていることがとても重要なのだと改めて再認識できました。ツールをうまく利用しながらコミュニケーションを図ることも勉強になりました。

・手話通訳の方の取り組みが聞けたのもとても勉強になり、今後関わる機会があった場合の参考になりました。とくに、「重要な話を本人より先に聞いてしまうことへの責任」を感じて勤めておられることに感動しました。必要な職種でも他人であり、普通は他人に介入されたくなくても頼らざるを得ない状況があることを痛感しました。

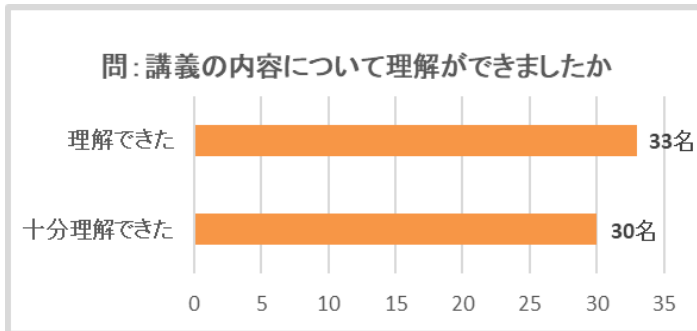
その中で手話通訳者をよぶのは対等なコミュニケーションをしたい思いがあるからだという視点は心に刺さりました。嚙唾の方のみならず難聴の方であっても、聞こえないことを理由にコミュニケーションを諦めず積極的に関わりたいと思いました。



3. 職員向け勉強会

第1部:病院全体で取り組む退院支援・在宅療養支援～事例を基に、支援プロセスを学ぼう～

令和6年1月29日(月) 講師:在宅看護専門看護師 参加者:63名



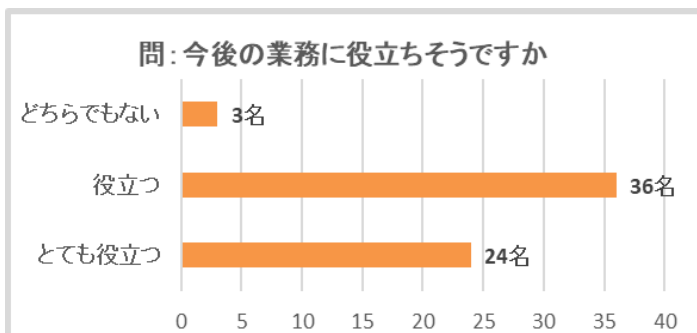
(感想)

•手順でまず医師に今後の治療方針を確認していましたが、家族、本人の気持ちを優先することをもっと意識していこうと思います。

•共通認識できるため同じ講義を多職種で一緒に受ける事ができて良い機会だと思った。

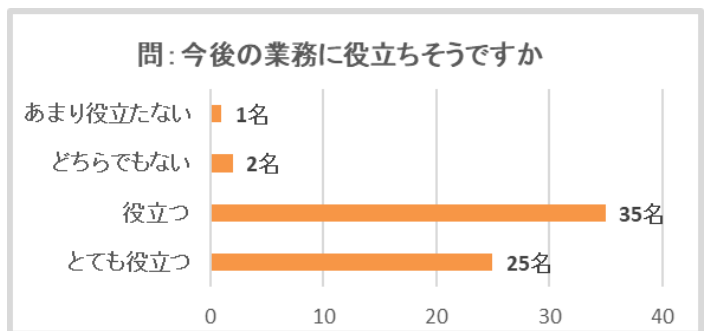
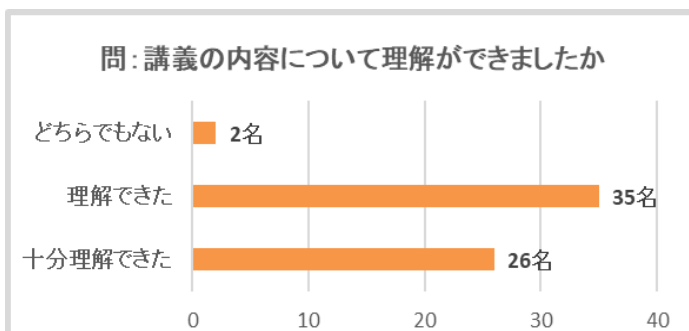
•患者の意向に沿った退院後の生活に向けた支援をするためには、入院中から患者本人だけでなく、家族の意向、医師の治療方針についても情報収集をなくてはならない事を学んだ。

•症例で検討できたので、分かりやすかったです。



第2部:自宅退院できない!どう支援する?～転院・施設入所支援について～

令和6年2月20日(火) 講師:医療ソーシャルワーカー 参加者:63名



(アンケート結果)

•具体例をあげながらの説明で、とても分かりやすく、理解しやすかったです。

•今回の研修は医師にも一緒に受講して欲しい内容だと思いました。

•「入院、入所費用の例」について理解するのに時間を要しました。「自宅以外の療養先」の一覧表は分かりやすく、貴重な資料を頂けてありがとうございました。「転院する意味、何に重きをおいているか」を大切にしているということがよく分かりました。

•大変興味深く、面白かったです。



次年度お知らせ

•がんピアサポーターの活動について。令和6年度からの活動再開を検討しています。

